



「まず握るのがない」「フライパンをシェットが空欄」。会場となった校内のホールに、「おさないときトイレをさす」というクイズに挑む子どもたちの声が響いた。国内やインドネシアなど津波や地震の多い地域の学校防災教室を開くPFI法人「フラス・マーズ」が考案した災害対応を想定した五つのプログラムの一つ。この日は子どもも高齢者

今度は自分たちが力に

石巻・大須小中学の子どもたちと高齢者 災害に備える体験教室参加



地域住民と協力し負傷者に見立てた人形を運ぶ子どもたち



紙芝居を使ったクイズに取り組む児童生徒ら＝いずれも石巻市雄勝町大須の大須小・中学校で

災害への備えを楽しみながら学ぶ「みんなで体験！防災教室」（「たいじょうぶ」キャンペーン実行委員会事務局主催）が10日、石巻市雄勝町の大須小・中学校で開催された。全校児童生徒13人は地城の高齢者のひとと一緒に負傷者運搬体験などに、「災害時には自分たちが困っている人を助ける」と意欲的に取り組んだ。

【宮城県信幸】

混合のチームで順番にプログラムをこなした。うまくできたこともくポイントがもらえる。とあって子どもたちも楽しみなから参加した。

混合のチームで順番にプログラムをこなした。うまくできたこともくポイントがもらえる。とあって子どもたちも楽しみなから参加した。

持ちやすく、落ささないようにするコツを学んだ。ジャッキを使い下敷きになった人救出する方法を学んだ。身近で手に入

る新聞や杂志を使い、応急処置したりするプログラムもあった。

大須小・中は高台にあって津波被害はなかく在校生も無事だったが、周辺では多くの住宅が流され、家族を亡くした子どももいる。小学5年の岡部佑成君は「けがをした人を落とさずに運べる方法が分かったので、災害の時は家にある毛布を持って助けにいきたい」。中学2年の小松あゆみさんは「災害時にもみんなで助け合うことができれば」と話した。

同小・中の教諭が事前に研修を受けて、この日のプログラムを指導した。大須中の平塚真一郎教諭（49）は「津波被害を経験した子どもたちも救える命があれば立ちたい」という思いで学んでいる。災害は「もしも回

りゃなくて「いつも」持ち続けたい」と語り起こるといふ意識を「た」。